

538

76

〇
複
写



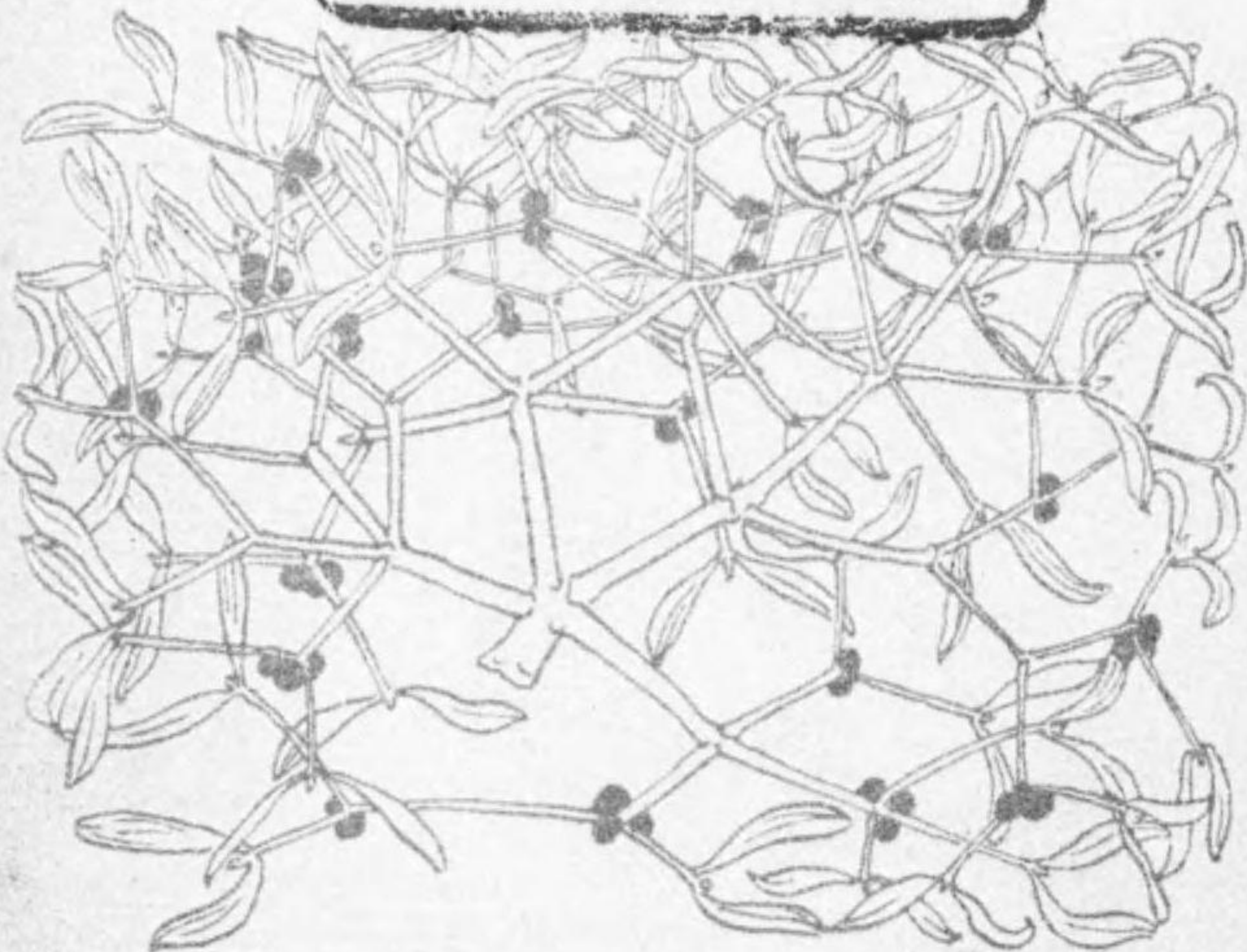
始





歌集
眉のりどみ

著子翠浦杉



京東
版堂星金

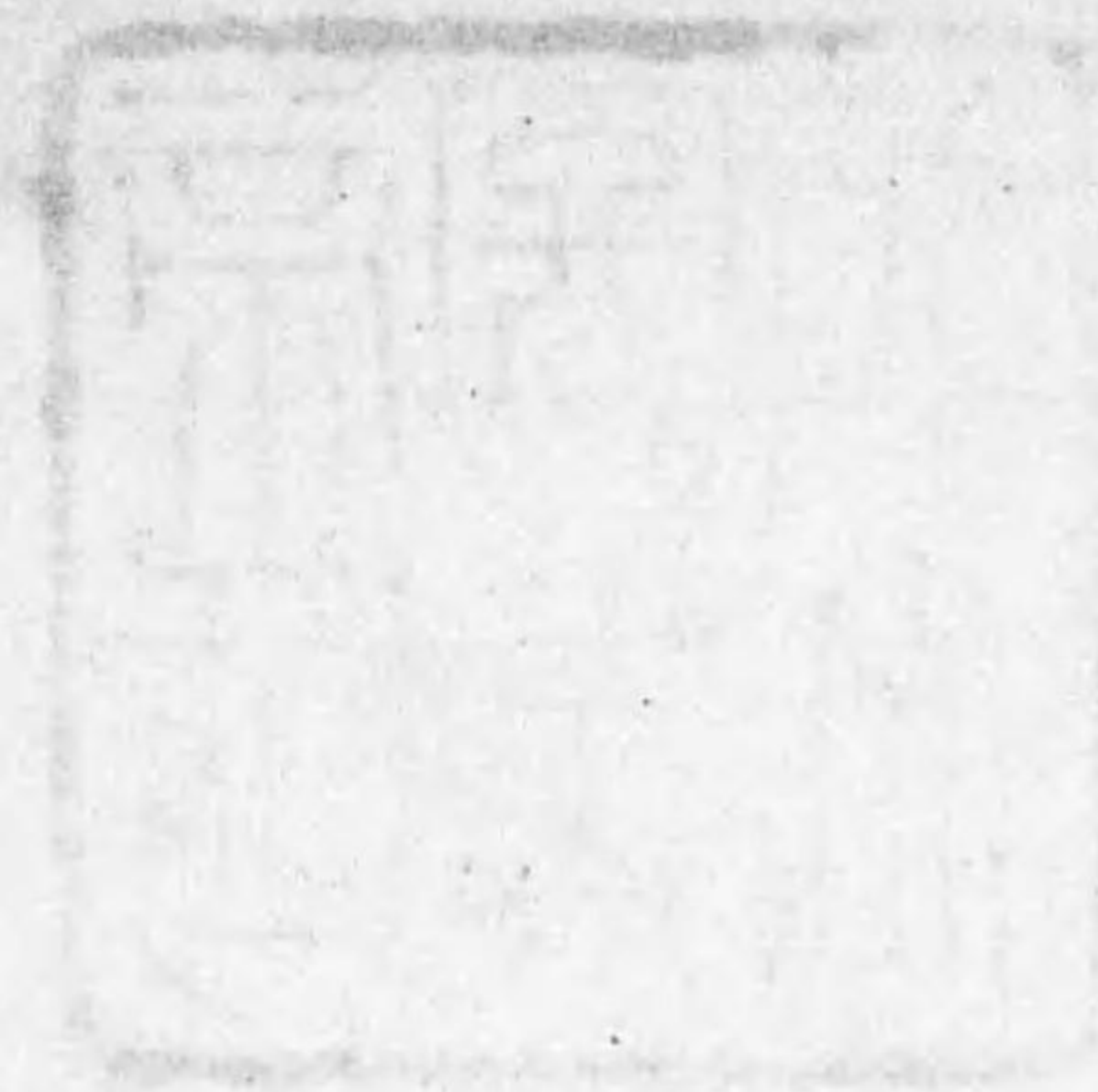
大正

14. 2. 21

丙文

538-76

歌集
眉のりどみ



822

232

17

17

はしがき

わたくしは言葉を有つ人間と生れたことを省みます。鳥獸には「ことば」がありません。けれど、「ことば」のない彼等には「表情」があります。私にたとへ言葉があつても、若し表情がなかつたら、どんなにか寂しいこととせう。表情とは心の現れであり、訴へであり、嬌えであると思ひます。そして、私は表情力による一種の光彩ある詩境をもみとめます。今この「みどりの眉」

一卷は短歌といふ形式を假りての、私の表情であります。私の表情力がもしも裕であつたならば、煩惱の子の私の醜い相が詩化され、淨化されてすこしでも見直されはしないかと、思ひつつ想ひつゝ、この一輯を編むのに幾度か太息を洩し洩しました。

大正十三年晩秋

翠子しるす

集みどりの眉目次

非水、翠子合作色紙……………巻頭
はしがき……………巻頭

大正十二年作

留守を守りて……………三
君は海上に……………六
冬日……………八
遊谷の大火……………二〇
雪ふる頃……………三

大正
14. 2. 21
内文

早春……………一八

櫻……………二

牡丹……………三

行春……………六

有島武郎氏の死……………六

浅間山麓千ヶ瀧にて……………三〇

大地震大火災を詠める……………三六

秋の芭蕉……………四一

我夫は……………四二

朝暾……………四四

落陽……………四六

大正十三年作

夫の手紙……………四八

冬……………四九

新年の歌……………五三

夫を迎ふ……………五五

雪……………五六

折々の歌……………六一

きさらぎの風……………六七

或日……………六九

春焚く落葉……………七一

夢……………七四

初夏の芭蕉……………七六

櫻散る……………七八

我罪……………八〇

雨……………八二

梧桐……………八四

千ヶ瀧高原の歌……………八六

初秋……………八八

瀧……………九〇

我庭……………九二

我ありて……………九四

焦土の秋……………一〇三

我家の月……………一〇五

秋の黒髪……………一〇七

犬の歌……………一〇九

日暮れ前……………一一〇

庭の菊……………一一一

返しごと……………一一三

秋の夜……………一一五

はかなき生活……………一一七

冬に入る……………一二〇

いかなれば……………一二三

亂雲……………一六
 偶感……………一六
 葉書……………一七
 安(白珠社歌會席上作)……………一七
 冬夜……………一八
 高原の冬色……………一八
 月は東に日は西に……………一九
 山頂の雪未だ淡し……………一九
 浅間の噴烟……………二〇
 山麓……………二〇
 汽車にて……………二〇

大正十一年作

眠藥……………二七
 除夜の鐘……………二八
 病を得て……………二八
 しづけさ……………二九
 箱根強羅……………二九

卷末の言葉

及川壽治子へ……………卷末二

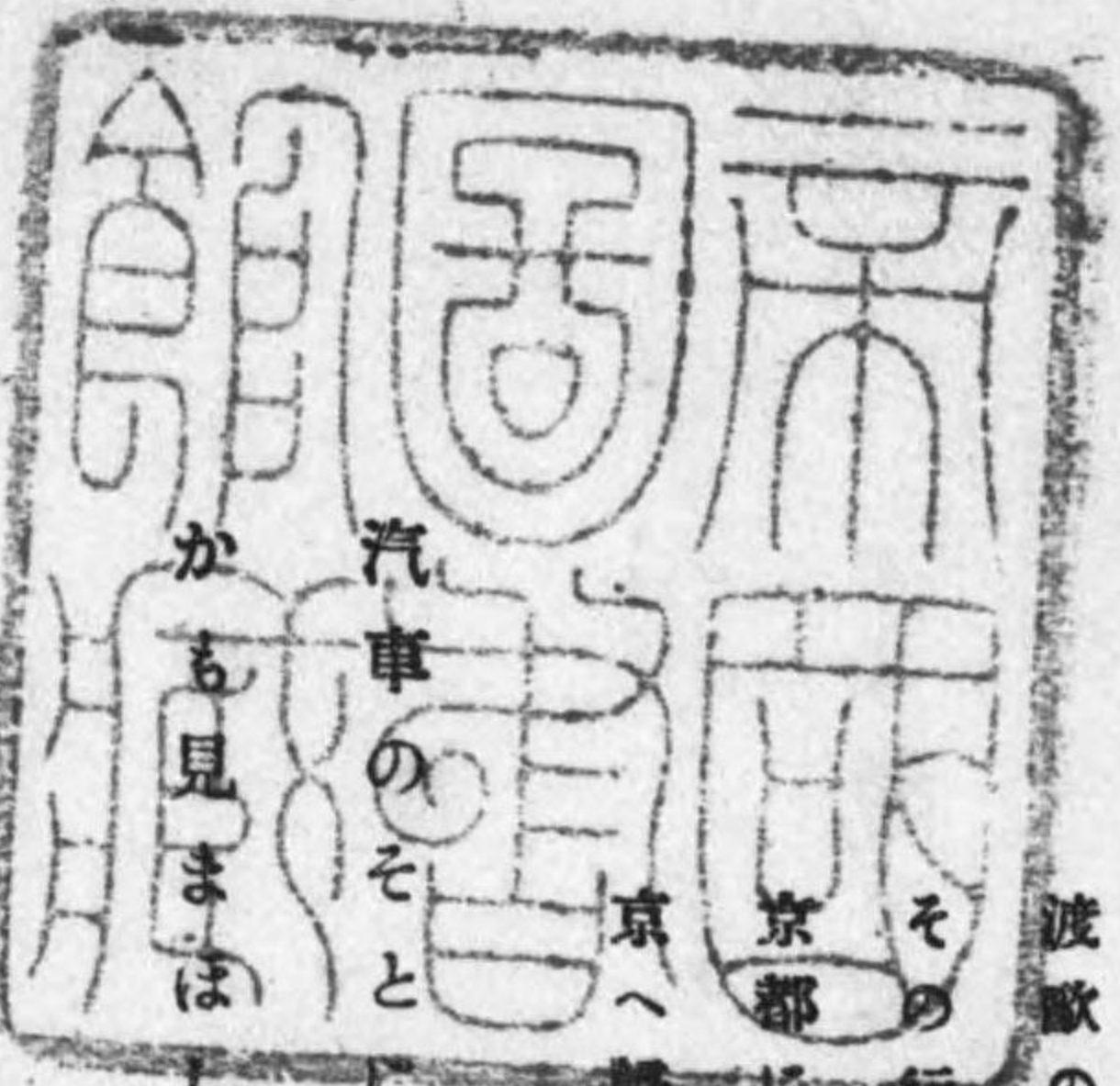
編輯手記……………卷末三

録田敬止様へ……………卷末三



大正十二年

留守を守りて



渡歐の途に上るべき夫は神戸港より出帆せんとす。その行を見送る爲に、我と福岡氏京都まで同行す。京都に三泊。大正十一年十一月廿三日、京都より東

京へ歸らんとする我を、夫驛に來りて見送りぬ。汽車のそとに立ち居る夫をなほひとめ我は見じ

かも見まほしけれど

。この國を君離れゆく日となりぬ悲しみ悔むとも

3 つひに及ばず

4
夫が身を我が慶ましく思ひけり必ず神よ守らせ
給へ

土變る海のあなたの夫の行き神し守らば危ふか
らめや

○眼閉ぢ悲しめるまも汽車行きて琵琶の湖さへ見
ずに過ぎぬる

汽車に居てひとりし見つつ秋更けし野山や今日
は悲しかりけり

○慰めに野山を見むと窓に向き目をあけてるて涙
たまるも

濱名湖に汽車かかれりと思へども水の湛へを見
む心なし

山を越え野を行き川を渡りすぐ汽車のひとひを
われ泣き暮れぬ

5
我が汽車は箱根を越えて日は暮るるいよいよ夫
に遠ざかりけり

君は海上に

〇いつまでか外國に在らす我夫の脱ぎすて置きし
衣たたみぬ

天が下に海路陸路や果しなく君往く國の道のと
ほさよ

描きかけて立たしし紙の残れるを見れば思はる
る夫の日頃の

船酔ひのくせなき君と思ふゆる浪の上にもすこ
やけくあらむ

冬 日

○霜けぶる朝空深し戸を開けていまだも低き日を
珍らしむ

硝子戸のうちの日向に我居れば肩に來りてとま
る蠅あり

日向にて昏らむ我目にさやりつつ飛びたつ蠅の
大きかりけり

君にいまだ嫁がざる日も我はひとり亡き父母を
戀ひて暮しき

○父母のなき身にしあれいかばかり辛かりぬとも
夫に仕へむ

父あらば母しあらばと思ふ心をさなき時と變ら
ざりけり

澁谷の大火

ぬばたまの暗^{くま}をぬきたつ炎^{ほのほ}の火遠空かけてあかりにけり

人の家を火に焼く空のあかあかし我れいつまで
か留守まもるらむ

大火の火消^ひなむとしつつあな寂しほのほの名残り空を染めたり

我家の近きあたりに火事ありと知らでや君の遠く悲しき

雪ふる頃

こまやかに降れる雪かも松の葉の針葉やうやく
に雪をとめたり

水盤の水面に降りて消ぬる雪つひに積れりその
みのもにも

今日の雪こまやかにこそ降り積れ日暮れと思ふ
に物音もせず

雪重く積りたるらし我門をあける音して鈴鳴り
ひびかず

雪の日をこもる寂しさ我夫はかならず無事にあ
りと思へど

外國に夫を遣りしを我が悔いてあきらめがたし
雪降る見つつ

二階より水をこぼして凹みたる瓦の上の雪の深
さよ

夢を見て物をぞ言ひしみづからの聲に驚き眼ざ
むる眞夜中

日にけに二階に居れば屋根の雪のいよよ乏しく
残るまで見む

遠きつまを戀ふるにあらず今日もかも枕あがら
ぬ床に泣きたり

わづらひて夫のみとりに藥飲みしわが命こそた
やすかりけれ

海とほきあなたの夫をあきらめてひとり愛しま
むかよわき我れを

軒の端に垂るる氷柱の脚ながし陽のあたりくる
を我はまつかな

庭の雪いちじるしくも解けにけり松の根もとは
むら消えにつつ

いかにしても我がゆきがたき國なれや我夫の居
るそのとほき國

遠き夫を呼びよせがたく病めばとて命死ぬることよもあるまじき

この冬の寒さに堪ふる我をかも或は君がとほく歎かむ

〇いゆきし日遠ざかりつつ数ふれど日はまだとほし君かへるまで

〇晴るる空に雲起り来て見つめるし氷の照りは忽ち昏む

〇霜ふかき朝々なれや杉の葉の陽にあたるかた赤くやけたり

風邪癒えて起くれば寒し髪結ふとこほる油を掌にしたたらず

冬の日の夕ぐれ早く戸ざしたり夫とほきおもひ身に迫るかな

早春

みんなみの枝にすなはち花多し陽あたる庭の白
梅の花

○春されば梅はかならず咲くといふ人偽らば悲し
かるらむ

ひとり居てわづらひがちに暮しつつ嬉しきとき
に涙ながれぬ

國とほくいませる君に憤る手紙いらいはしたため悲しく
て泣きぬ

○とほき人に我が遣る手紙早くいゆけこの憤りを
知らじといはせじ

春の雨ひとよを降りて水盤にうろくづ飼へる水
溢れたり

冬に入りてあかくさびにし杉の葉が雨降るごと
に色立ち直る

我家にわれはとどまり暮らせどもつまは遠くに
何して暮らす

二人居りとも心むすほるる冬の日を今年はひと
り暮しけるかな

留守守りて久しくなりぬさもあらばあれつまよ
我身は忝きに

土を破り吹きいでむとする芍薬の若芽ふかかる
くれなるを見よ

櫻

われ留守をまもりていとまおほかるに櫻花咲き
いそぎ散りゆけり

この風に散れる櫻の花びらを水面に見ればまだ
新らしき

櫻ばな咲きて散りゆき春たけぬつまのたよりの
くる日もありぬ

我庭の櫻咲きぬと告げまくも四十日の後に君は
聞くらむ

君とあらばかかる閑けさなかるらむ花散る庭に
物をしぞ思ふ

○山吹の一重は散りぬつぎて咲く八重のさかりも
またひとり見む

牡丹

おもむろに牡丹の花は咲かむとす大きな花びら整
ひにつつ

朝風に花瓣ほぐれて咲かむとす牡丹の花に露ひ
かりけり

○花蕊を深く包める白牡丹なかば開きてふくよか
に見ゆ

花びらのひとつひとつに趣ありて白き牡丹の咲
きにけるかな

永き日をしばしば見れば白牡丹午後の日ざしに
形かはれる

この庭に蝶の飛びかふ絶間なし眞向く牡丹を掃
る風もなく

花そこより大いなる蓋あらはれぬ咲き極まりし
か眞白き牡丹

白牡丹さき極まれば蓋いでて花のかたちがひら
たくなりぬ

夕ぐれを萎まむとする白牡丹大きな花びらを曇
かけたり

よべの雨牡丹の花を叩きけむ花蓋ばかり残れる
寂しさ

雨の世の牡丹の花は雨に濡れたる葉

くづをれし白き牡丹の花びらが雨に濡れたる葉
にへばりつけり

行 春

おそく咲きて春の名残をとどめたるその八重櫻
も散り過ぎにけり

枸橘の刺さへいまだ柔き今日このごろの日のた
つ惜しき

告げやらむ事はありぬとも遠きつまの憂うれとなら
ば悲しかるらむ

棕相の花咲く日となれば不眠症ごに去年おととしのこのこ
ろも苦しみけらし

眠られぬ病をもちて眠り得し心のやすらぎ我わがを
寂しうす

これの世に父母もなく子もなくて誰にこの身は
悲しまるべき

有島武郎氏の死

みづからの命絶たむはたやすしと思ひ入る時揺
らぐ玉の緒

〇死はも死はもたやすかるらむ飛ぶ鳥は小銃こじゅうに當
りひとときに墜つ

生ける人死にたしと死す然かれども我が生いきた
かる命の悲しさ

これの世に恨みをもちて猶死なず生いきの命をさ
びしむ我れは

咲く花の常なきが如し時により捨つる命に生いけ
らく我は

我命の果はつる或は近きかと心ひそかに怖るるこ
のごろ

浅間山麓千ヶ瀧にて

碓氷峠のほりつむれば雲のるる浅間の麓に近づ
く寒さ

久方の天あまに鎮しづまる浅間嶽まみに迫りて低山に見
ゆ

浅間山に煙やたつと眞ま日ひなかの照りの極まりに
見入る寂しさ

○浅間山のいただきにして幽けきは雲かと思へど
まさに煙なり

久方の天あま照る空に煙吐く浅間火の山よろづ代ま
でに

山はあれどおのれ煙を空に吐く浅間ヶ嶽の荒ぶ
その肌

夕焼空きはまりぬれば我が浅間のむらさき動く
なりにけるかも

天そそる山の根がたに落ちくほみ遙に青し信濃
の狭野は

八千草の花咲きみつる高原に命やすらけと眠り
來にけり

○硝子一重に夜風を防ぐ家なれば宵の稻妻枕にひ
らめく

淺間山暮れむとすらむ傾ける陽のありどころの
黒雲かがよふ

西より東にかけて尾を曳ける陽の筋ながし夕つ
く黒雲

日輪の傾かむとするその光り黒雲を射てあやに
かがよふ

日輪を包む黒雲きはまりて光を放つ十重に二十
重に

日落つればとみに冷えゆく高原のしけき草生に
蟲の啼く聲

遠山の山背にこもる夏木立つばらかにして日は
照りとほる

おほらかに曇る高山低山の霧に浮きいでて見え
くる山あり

鶯の啼かすなりにし高原の夏おとろへて夜なよ
なの蟲

かくのごとく高原の夏は過ぎむとす暑き日もな
くて丈伸ぶ萱原

白樺の黄ばめるを見れば八月を既に秋かと驚く
高原

暑き日のつひに來らぬ高原に過ぐしし夏や思ひ
も深く

大地震大火災を詠める

○飛ぶ鳥もとび立ちかねつ行く水も逆巻き敢へけり
動響す天地

地の神の叫びとよもす渦巻にまかれて命もろもろ死ぬる

地震やます怖れて庭に床敷くとさまたけになる
萩の枝くくる

○土の上にい寝る今宵を忘れめや大正十二年九月
一日大地震ふるふ

筵敷きて庭べに寝れば袖さむく秋の夜露のおり
くるを思ふ

○土のへにひたに長まり寝たるゆる揺りくる地震
にもはらに揺らるる

○あまつさへ地震に起れるまがつ火の叫び廣がる
四方八方にかけて

大火の煙晝は日を塞ぎ夜となればあまねく明
し見渡す火の海

○地上の火天を焦して打昏らみ日は晝ながら日の
光なし

地上を走るわざはひの火は廣がりて日夜に燒き
ぬ大き都を

夫の留守を完たからせよと常いのる心こよひを
極まりにけり

庭に寝て夜あかす空に火はなだれ曉近かづくに
白む色なく

わざはひの夜はあけにけり道の上に人々の眠り
露なるかな

夫の留守につまの秘藏品こわれたる地震を知ら
する我が恙なき

我が眼には涙たまれり大道にひとつ床敷きて眠
れる母と子

40
娘よ妻よとひとにいたはるる世のをみなこは羨
しきものを

生きながら焼けし屍の幾萬を骨にする夜の匂ふ
を知らずや

焼跡を整ふための爆發の音と知り居て驚くその
音

二千年のながき國史にあととめし大地震の記憶
生命に刻まむ

秋の芭蕉

軒の端に諸葉を組める芭蕉の葉破ぶれざる葉が
なくなりにけり

いささかの風にも秋の芭蕉の葉破ぶれやすくも
なりにけるかな

我夫は

我夫は必ず歸るかへらずばこの身果敢なみ死す
らく我は

我命つひにひとりと思へども遠べなる夫を心に
憂ふ

○佛蘭西の都はけだし住みよけむいつの日君は歸
りきまさむ

○はるばると我が眼とどかぬ遠きへのつまの生活
に心あやぶむ

○我が夫よ君が妻なるこの我に見しめしさまをよ
そにつくらすな

○我が知らぬ國にひとりしおく君に心疑へばあり
としもなし

43
1 送りこし寫真を見れば我手より離れしつまはみ
めまさりけり

朝 暾

あけがたは澄み渡りつつ低空に今のほる日の茜
かがよふ

この朝もひむがし空に押しほる太陽にさきだ
ちて色著く雲あり

木枯の風吹きやみてひむがしに朝曉雲はたなび
きにけり

Ch. Sun too cold

登らむとする日の影のほがらけき朝明空を飛ぶ
鳥のあり

落陽

ここに來て見とほせらるゝ地の果てに低くなり
 ゐる陽の大きさよ

遠き日は傾きかけて頸ながき我身の影を地に曳
 くさびしさ

めぐりめぐりて日輪地に沈まむか圓き日の輪が
 缺けそめにけり

大空と大地相寄るまさかひをとどまらぬ陽の落
 ちゆく早さ

たなびける夕雲さびし天つ日の入りて後を更に
 輝く

夫の手紙

佛蘭西の都住みよしと書きよこす夫の手紙に心
ぞくもる

をのこやも心し憎しいづち行きいづべの國にも
安く住み得て

あなあやし我手はなれし遠夫とほの反かへりてすこやけ
くなりまさるとは

冬

まさびしく冬はくるとも遠き國に居るひとゆゑ
に守るわれかな

よそひとを戀ふとしあらばゆゆしからむつまに
慎ましく我は來にけり

をみなごの我が魂たまひのちかひにはふたり戀ふらく
許さざりしか

大正三十三年

新年の歌

玄米くろまいにいのち繋つなぎしその日ひさへ忘わするる心こころなし歳としきたるとも

この都みやこ亡なぶることなしひむがしに海原うみはら展ひらけ富士西にしにあり

草くさや木きや焦あせけつつ芽こぼぐむ焼跡やけどあとの土つちにこもれるいのちを思おもふ

新玉の年たちにけりいちじるく焼跡にして若さ
こもれる

あづまのや土はゆたかに國漢し興る都は萬代ま
でに

日本橋より遠富士見ゆる焼跡や日月ほろびす歳
あらたまる

ものみな^の歳^あけにつつ改まる土より春の動き
そめつも

夫を迎ふ

大地震の起れる國をはるばると海のそとより我
夫憂ふ

地震ありて海のそとなる我夫のかへり早めしを
口惜しと思はず

一日だに長く巴里にとどまりて物學ばせとす
めざり我れは

ひとり居し我が術たぎなさも長かりきかへりく君に
疑ひもなし

久々に逢はむと思へば豫あかしめうら恥しも我夫わがつとなが
ら

かへりみればひととせ餘りの君が留守まもり果
して悔心なし

十年ととあまりかしづききにける我夫わがつとの荒き物言ひ
を聞きしことのなく

母あらば愛兒まなごなる我ぞ母なくておほよそにすな
背子わがせこよ吾背子わがせこよ

雪

水盤の水動くことなかりけり雪たひらかに積り
けるかな

水のおもてにうは白みつつ積りたる白雪の色は
寂しかりけり

雪厚く水盤のふちに積みしゆる水面さがりて見
えにけるかも

厚き雪ただにたやすく凹みたりこほしし水の滲
みとほりつつ

冬の日の曇りをうつす水盤の水に浸りて潤める
雪あり

白雪の色なくなれるを見るものか水のおもてに
浮び居にけり

軒の雪手洗ひ鉢に落ちけらし柄杓沈みて水ゆた
かなり

慌ただしく暮す我れかも雪降りし日さへ忘るる
 に消残る雪あり

折々の歌

椿の蕾なほかたけれどくれなるの色に咲くべく
 紅さしきたる

この朝もしみじみと思ふ我髪の櫛にあまること
 なくなりにけり

黒髪の丈ながかりし日は過ぎぬ歳々に我が寂し
 みゆかむ

折ふしの手紙は我に残り居てよこしし人は遠ざかりぬる

我がみめの衰へたりと思ふだに悲しきかなやい
つくしまれつ

用事ならで果敢なきことを告げてこし人の手紙
の古りしかなしさ

我許に残れる手紙見つつ思ふ君もかつては斯く
若かりし

隙間なく櫻の枝は連れり振り仰ぎ見れば花空を
掩ふ

春雨の音をこそ聞け樋を傳ふ雨垂りならしとき
れとぎるるは

壁によせて床敷き寝れば樋を傳ふ雨垂りの音い
と近きかな

この宵も眠りがたしと思ひつつ眠りたるかなや
夜は明けて居る

もろともに生いきの命いのちの衰おとろへの必かなずあるを忘わすれ暮くすも

今日けふけふとみづからの生いきを怪あやしまず暮くらせる
を思おもひ戦たたかきにけり

をみなごの我われやくやしも夫つとによる心こゝろゆるびを願ねがみにつつ

夫つとの眠ねり深こしと思おもふ夜よ半はんにしてかすかなる地震ちきん
揺ゆりすぎにけり

昨夜こゝろのよも今朝あしたも地震ちきんのさゆれしを夫つとに語かたるを
忘わすれ暮くらしし

ひとり居いの寂さびしき時ときしも夫つとあらば堪たふべき我われと
思おもひけむもの

〇かくばかりたより交まじはしし人ひとさへや理こと由ゆもなく
て疎こくなりぬる

朝あ々はいまだ霜しもおく土つちながら芽こゝろ立たをいそぐ芍藥せきやく
あはれ

夫とあらば寂しからざらむと思ひけむその日の
心薄らくなゆめ

恨みつつ君に手紙を書かむとし我がすこやかを
告ぐる口惜しさ

ゆきあしきぬかるみ路にともなはれ蹟かば我が
君に蹟け

きさらぎの風

荒き風そらに埃を吹き上げて日は薄れつつ晝た
けにけり

きさらぎの風吹きとほるたまほこの路は寂しく
日に白みつつ

埃あけて吹きめぐる風とどまらず天つ日の下濁
りけるかな

6. の騒がしく聞き居し風の音やみぬ何か心に忘れし
ごとし

櫛にすけば髪によごれのいちじるし埃吹きたつ
る朝夕の風

風落ちて雲うつくしく流れたり埃眼めにたたぬ夕
べとなりて

荒き風静まりにけり水の上に月の光のうつれる
を見む

或 日

夢にだに見欲みしと君が面影おもかげに思ひつめたるに戦ま
きにけり

我れのみのみの戀にかあるらし夢にさへ君を見ざる
は心なきとか

眠られぬ夜半の雨戸を我があけて心うたれたり
69 冴え居る月に

この朝は梅とること物憂くて夫に我が見する
 髪のみだれを

我夫に守られにつつ憂ひなき月日いつまで續く
 にかあらむ

春焚く落葉

土の上に櫻の花びら消え失する頃ほひやまた暮
 が溜る

常に見て久しくなりし八つ手の實みの黒すむ春や
 ふけにけるかも

夏に入る濕りは深し庭土に焚火の煙ながれたゆ
 たふ

72
○ 落葉たけば八つ手の葉のみしかすがに灰となり
につつ形に残る

○ 火に置けば炎を塞ぐ八つ手葉の下くぐりてぞ煙
はのほる

○ 燃ゆる火をあはれがりつつ八つ手の葉これも焼
かなと火に投げ入るる

芥たけばまじれる椎の硬き葉に炎のうつる音ぞ
きこゆる

燃ゆる火の炎のさかりに音たてて芥とともに焼
くる葉のあり

芥たけば残るものなくそのあとに土焦けたるを
寂しくも見し

夢

ひそかなる悲しさに堪へ眠り入るおのが寝姿ひと
 とな見せそ

あるべくもあらざる事を夢に見し胸騒ぐかなや
 あかときに醒めて

うつつには相語らへることなきに何しか夢に君
 を見にけむ

我心まさに戒めあり經つつ見るべからざるを夢
 に見にけり

夜の夢さまさまにこそ哀れなれ時たちゆかば忘
 られにつつ

翌^あけぬれば事にまぎれて忘るゝに昨夜^あ見し夢の
 猶まさやかに

汗かきてまさに見にける夢さへや眠り醒むれば
 跡かたもなき

現まには遂に見がたき人をかも夢に見たりとて何
かは騒ぐ

夢に見て心わななくこの我を咎めなばとがめよ
さもあらばあれ

この心憚らはしく泣きにけり小夜具こよぐの襟えりに聲か
みしめて

初夏の芭蕉

軒の端をこえて廣がる芭蕉葉の風孕む夏となり
にけるかな

夏くるや昨日きのうも今日けふも芭蕉葉の玉解けひろがる
その速かさ

先きにいでし芭蕉その葉は古び見ゆあたらしま
葉が翳すみどりに

つぎつぎに巻葉ほぐれて色かざす芭蕉のみどり
常あたらしき

芭蕉葉にすがりて同じ青き色の雨蛙見るこの夕
まぐれ

軒の端に葉先支へて廣がれる芭蕉の葉鳴り聴き
つつぞ居る

この軒に葉先支へて居る芭蕉日が照りくればそ
の葉のみ暗し

櫻散る

○我心の記憶に残る日もなきに寂しきかもよ櫻散
りつつ

別れなばいつの日逢はむこれの世に現身ふたつ
遠ざかるらむ

79 ○時ゆけよ月日よゆけよ忘れゆけよ再び逢はなと
盟はざりけり

別れなばまたいつの日か我命をはかなみ思へば
逢ふ日のなけむ

我 罪

我のみのおもひと思へ楽しくて胸に描きし人を
いのりぬ

慎ましく君を祈らむかくありと言ことにしいはばゆ
ゆしき我罪

かりそめの君が言葉も我胸にいたく響くは何の
迷ひぞ

我心あやに昏めば君がいふ言のはしばしにも思
ひ亂るる

かたみに心たがひて絶えにけり涙ながるるよ我
が拙さに

○君が物言ひにさもよく似ると耳すませり此處は
いづくぞや汽車の中なる

我心あさましきかなや君も死し我も死にたる夢
を見て居し

つらき世に思ひ秘めつつ夢にてはわれあまたた
び君を奪ひし

我思ひきかれざりともよしえやしきかれざりと
も我は祈らむ

この身すでに人の妻なる身の覚えくやしきかも
よ偽れなくに

朝夕の食にも心慎みしいのち今にして輕んずる

よ我は

神わざの奇しきかあらば今ここに君を見しむる
術あらしめよ

人妻の命を洗ひあらためて物は思へと我に聲す
も

雨

雨降れる庭は小暗し木の葉より落ちくる雫をり
をり光る

上葉より落つる雫に下の葉の震ひやまぬかな雨
こまやけき

八つ手の葉を傳はりにつつ雨しづくここに落つ
るらし土の凹める

86 ○ 薔薇の葉の表にとまる雨のあしひとつひとつに

玉ぞ結べる

雨に濡れひた重なれる葉もありぬ仰けば色透く

風の若葉

何に當る雨音ならむ我が深く物を思ひ居るに心
ひかるる

梧桐

梧桐のふかき繁りに日はこもり葉さやぎしるく
光散りつつ

梧桐の葉かけしきりに亂れつつ此處こゝに陽ひかりのこも
る夕べとなりし

千ヶ瀧高原の歌

天づたふ日に匂ひたつ浅間山朝かけろひ夕照る
までに

渡る日の空に果てなむ寂しさや山の背向の夕影
あかし

國原のたかどにたどり來て眠る浅間が麓夏澄み
わたる

山裾のかたむく地に我が立てば信濃たひらは眼
の下にあり

浅間峰の焼山肌やまはだのふくらみに沁みとほる光もこ
ころよく見し

西空に廻りゆく陽の近づかむ浅間の山に雲たむ
ろせり

雲を押しして天よりくだる夕光り浅間を断ちて山
裾にとどく

夏の雲湧き起りつつ浅間峯のなだれに添ひて高
まりにけり

浅間嶺に雲のゆききのかかりたり陽が照るゆる
に影をひきつつ

あかときのいまだ暗きに眼ざめたる我より先き
に啼く鳥のあり

下草の萱をなびかせ吹く風の遠く鳴りゆく落葉
松はやし

山と空と相寄り澄める色ふかしあしたの空は晴
れにけるかな

大空の碧に描く高山のとほきうねりの今朝あき
らけき

○日ざかりは鶯のこゑもとほくなりて眞晝を深む
照りしづけさよ

豁深く下りて仰ぐ空蒼しそぎたつ山に狭まれに

つつ

天つ日の光をとほく仰ぎけり水を尋ねて豁深く
來し

山はざまに疊まる岩の色黝し陽の影ささぬ水の
垂りつつ

歩まむもの我れひとりなる山路にて呼ばふがご
とき郭公のこゑ

かつこうのるところ遠しと思へども山こだまし
て響く聲かも

深山の樹立洩れくる陽の光りあやにあかるし白
樺の幹に

穂を朶む芒の葉さきふくれつつ糸をほどかむ日
は近づけり

山路くれば松の枯葉に埋もれたる苔のみどりを
踏む人もなし

日のかけのまれまれにさす谷あひに花咲きこぞ
る寂しかりけり

ここに來て風の音さへなかりけり深山樹立谷を
埋めて

白樺は深山谷に素直なる幹伸ばしたり天をさし
つゝ

山深くひとり來にけり土に居て我に驚かぬは何
といふ鳥

谷川のながれ及ばぬ砂地にはひくき小松が下枝
張りつゝ

河はらの眞晝の砂に影ひきて高きも低きもみな
小松なり

我心をいかにとも我がなしがたし淺間燒肌に日
は照りつくる

夏の雲離れてゆくや遠山のごごしき山背陽にま
ともなる

ほととぎす聲つゞかせて今日の日の暮れむとす
るに啼きにけるかな

麓原の灯ともし頃となりぬれば居どころ分らね
ど水雞なく聲

山里にひとりし住める我が思ひをいや寂します
水雞なくこゑ

浅間山に夕燒雲のながれつゝ山ほととぎす鳴き
たちにけり

天雲あまぐもにいゆきあひにし浅間嶺あさまねの煙は残る雲晴れ
ゆけば

朝な夕な浅間嶽あさまがきにふりあふぐ天あまつみ空に雲絶間
なし

落ちなむとする夕影をそがひにす浅間高峰あさまねは色
燃えたてり

夕づく日さすや浅間に湧く煙り金色こんじきに染まりた
なびきにけり

入い日ひさす夕くれなるに火の山の煙りのなびきゆ
ゆしきものを

なみよろふ遠山なみを濃く薄く色にわけいづる
夕暮れの色

千草咲く花野が原につまとわれと暑さ避くるの
粗家作りす

つまと我と思ふ心のたがひたるこの日は寂し夕
ぐれの空

天なる浅間嶽をかくしたる雨雲の垂りおくが知
られず

雨雲は山あるかたのみ空より動きつゝあれや麓
見えそむ

友のくるしらせにも我が山家住みしづけき心動
きけるかも (國原明子さま來る)

友の來て寂しがるなり山家住み我も都に育ちし
ものを

初秋

高原の家生まれまれに宵ふけて光するどく星空に
満つ (星の歌以下十一首)

浅間嶺の麓が原の夜空には天の川ひくし星満ち
足らひ

天つ星の満ちうづもれるぬばたまの夜空のした
に灯の影もなし

我があたりあやめも分かすしかすがに夜空には
満つ星のかがやき

天の川はだらはだらに諸星のむれをぬきつゝ織
りながれたり

ぬばたまの夜空に迫る土踏めば星輝けり我が行
く先きに

ゆけどゆけど空に果てなき星のむれ我を離れず
物凄くなりぬ

天つ星みな光もち我に向けり心寒けく行き憚か
りぬ

この空に星ひとつ飛び諸星の澄み居るむれを
亂して飛び

影ひきて我がまなかひを飛ぶ星のゆくえもしれ
ぬ星の數かな

このよらの星の光りに魂打たれ身のおほえさへ
胸に苦しき

外にたてば身ぢかに迫る夜の空や満ちあまる星
の隕ちくるがごとし(以上)

谷はざま地きはまりて路もなし夫に逸れてたじ
ろぐ我はや

深山の狭間に路を求め居てわれを呼ぶ夫の聲を
おどろく

天翔り風吹くらしも淺間峰の煙りのなびき斷ち
ちぎれつゝ

浅間嶺の煙りは風に飛びけらし山離れたる空に
浮べり

岨路まじろより我がふりあふぐ松山の松の枝えだぐみに空
透きて見ゆ

麓原見わたす限り穂にいでてたけの揃へる花芒
かな

芒の穂みな糸さばきとけにけり野の遠ち近ちに
紅にながしつゝ

山のはざまにししうどの花咲きにけり夏も老い
たる風あらあらし

女郎花もをとこへしも咲けり日當りのよき山峽やまがせき
の八千草の花

つりふね草つりふねくさのこぞり咲きゐる花明はなあかりり谷あひ深き
水のべにして

つりふね草つりふねくさながれを被ひ咲くなべにせゝらぐ水
は花動かせり

有明の月影西にかかりゐて淺間高峰はあけそめにけり

朝影に煌めく天雲あし早み淺間高峰に押しまさせまる

樹々のかけ土にあざやかにけり登る朝日の天高まりぬ

○麓原明けそめにけり飛び立ちて空を横ぎる鳥二

羽三羽

この夏を住ひ果して戸を閉づる家の廻りの松蟲草のはな

瀧

〇ふり仰ぐ木の間より落つ瀧の水岩山を断ちてと
よみけるかも

足曳の岩山眞洞晝くらく仰ぐ瀧の上に霧たち迷

ふ

たまゆらに陽の七色が見えにけり瀧のしぶきに
日はななめして

岩走りとどろと鳴れる瀧の水脈の極まりもなき
あやを盡しつ

さなくだる瀧の裏への岩壁にむす苔の色とこよ
さびぬる

瀧津瀬の音のとどろにわななけり水に躍りて命
は断たじ

我庭

樹々やがてもみづるならむいちはやく櫻は黄葉
を落しそめたり

我ありて

佛蘭西にふたたび行かまほしきつまの思ひ遂げ
させがたき我かな

我今ぞ生き居る死にて後にこそけだし我背子何
おほすとも

つまの髪に此頃氣づく白髪は心づかひの故にや
と悲し

の子をうまぬ身にしはあれど我ありて寂しがらせ
 じ夫に此世を

をとめ心の命に盟ひ嫁ぎこし子をうまぬとて勿
 疎み給ひそ

我身には此の世のいたく寂しきかつまを離れて
 ゆく家もなし

我夫のそとでのひまになすことを持ちつつ夫を
 外にやれば寂し

焦土の秋

夏四十日を淺間山麓に過して久々
 に歸京せし我が東京の痛々しさよ

焼跡の都の土をけさ踏めばさやけさのあり秋來
 るかも

焼跡の都にも秋は來りけり西べを染めし夕ぐれ
 の空

114
○焼けてより思はぬ方を空ひろみ流るる雲の夕づ
く寂しさ

天が下に秋みつるともあらがねの土の爛れに生
ふる草もなし

我家の月

宵々にこの二階より仰ぐ月望にも近くなりにつ
るかな

✓ 今宵こそまさに望の夜照る月のうらうらしかも
圓さ満ちて

115
中空に仰ぐ月かけきぞの夜に見しまどかさはや
や缺けたらむ

この月の細りゆくらむ寂しさや望の夜を過ぎす
でに缺けたる

秋の黒髪

をみなごの悲しきところに堪へしのぶ秋は黒髪
ぬけまさりつつ

年を経て面忘れゆくひとの顔夢にし見ればまさ
やかに見ゆ

おもかけを心にしつつ庭にむき何も見ざらむ
凝らしし

犬の歌

他所の犬の吼えつき寄るに石打つも我につきく
 我犬のため

○ひとり我があらまほしくぞ庭に居て尾を振る犬
 にさまたけられつ

○我を見れば思ひあまりて飛びかかる犬の振舞ひ
 押へかねつも

我れつひに子を生まざりし思ひ湧く懐のなかに
 仔犬抱けば

懐に我が抱く犬に物をいふつまのことはやさ
 しかりけり

をさなくてまだ齒の生へぬ犬の兒に我が指吸は
 す牛乳をぬりつつ

兒をとりて弄び居るこの我にひとみを凝らす母
 の犬の顔

日暮れ前

時ながく物をこそ我が思ひしか寄る心なく柱に
よりて

繪をゑがく夫の後に針もちて炭つぐ寒さとなり
にけるかな

庭の菊

秋ふけて庭の豆菊土のへに咲きたわむべくなり
にけるかな

まさなるつぶら蕾のひとつふたつ咲きいでし
見れば黄色豆菊

土の上に埒はらなくなりし豆菊が穂先ほのさき起したり蕾
咲かむと

返ること

敬へば忝しと思へども諭す御心にさびしさおほ
ゆ

秋の夜

長雨のやみにし夜半に耳すませど音にいづる蟲
絶えにけらしも

我が體の弱きに心まかせつつ怠れるまを秋ふか
むかも

はかなき生活

ともに食す朝餉夕餉にも寂しまるるいそがしく
して言減る我がつま

いささかの針の業なれどつとめなば夫のせはし
さに叶ふかと思ふ

風邪ひきてまたこの我を悲します口惜しきつま
をみとりするかも

薬のみし夫の寝息をきき居れば我が何事も果敢
なき思ひす

冬に入る

冬に入る庭の手入れに松の葉の枯葉拂ひて見な
ほす枝ぶり

冬に入る庭のさびれをかさこそと枝うつり居る
は啼かぬ鶯

いかなれば

いかなれば人の心を動かすに我が難かたきかなや眞ま
心を有もちて

恨めしと思へる君をもよそ人が誹らば我は憤ろ
しも

亂雲

登らむとする陽を見ればこの風に吹き拂はるる
朝雲の疾き

ひむがしの空のはたてに雲切れてあからひくか
けほがらけくこそ

さやる雲をぬきつつ登る朝日子の光あまねく天
照したり

偶感

名を慕ひをみなこころを哀しまぬさびしき人を
ともがらに見し

生くるまは音にししのばく現身のいまはのきは
に君が名呼ばむ

葉書

短かる葉書のふみにも偽りの影をだになく身に
沁み讀みぬ

○葉書にてたよりを果し給ふべく我に疎くもなり
給ひけり

この文字のほかなる深き思ひにも吾は觸るるら
しも君が書く故に

安

(白珠社歌會席上作)

色づきし木の葉さへ散るこの頃や心安むするい
ちにちもなく

安らかにありとなもひそみづからを顧みくやし
めるこの明暮れを

たまたまに安らかにこそ眠りしか見たりと思ふ
夢もおほえず

冬
夜

寝入りつつ息の音だにせぬつまの寝顔の上に灯
をよせて見し

すこやかを常にぞいのる我夫の寝息をききて愛
しむ我は

高原の冬色

十一月六日千ヶ瀬高原にゆく。紅葉既に
過ぎて満目冬枯れたり。浅間おろし寒く
骨に徹す。山莊みな閉ぢて人跡絶ゆ。
さすがにひさり一つ家に寝がたく。會社
の賄所に泊る。滞在三日間。

この國に冬早くして浅間嶺のいただきすでに雪
を被ける

ひとり來て秋もなかばに降る雪を浅間高嶺にふ
り仰ぎたり

いそがしきつまとは旅にいでがたき我を歎けり
秋の山をゆき

よそほひもつつましくして里人の目に觸れざれ
とひとり山を越ゆ

するどき寒さにや入る高原の樹々骨だちて草枯
れにつつ

あわただしく暮ししを思ふ來て見れば青山は黄
におもがはりぬる

八千草の花のさかりに我ここに在りしは夢かこ
の冬枯れを

天つ日の光沁むとも枯原や匂ひ燃えたつ草の葉
もなし

○枯草に籠り居たらむ小鳥らが我があゆむべに飛
びたつ寂しさ

小鳥らがまなこ集むる實は赤し色寂びはてし枯
原にして

風にむき繪をかき居れば油氣あぶらけの失せし後のちれ毛け頰はにうるさし

○ 桔梗ををみなへしをここに手折りけむ記憶おぼえさびしも野は冬枯れて

月は東に日は西に

麓原あしはらに竹たけみて我がひとりなり月はのほるに日は衰おとろふる

高原たかねのよもを圍かこめる山見れば日はまだ高たかきに月のほりくる

月と日とめぐり寂しく相逢へる冬の夕空澄みきはまれり

山の端に日を落しめし冬の空月をむかへていや
澄みわたる

山頂の雪未だ淡し

煙吐く淺間火の山冬來りて雪被づくべくなり
にけるかも

よべの雨嶺には雪とぞ降りけらしけさ見る淺間
高山白し

淺間嶺に降れる白雪まだ淺くはだらはだらに土
を見せつつ

昨日までいただきにのみ白かりし雪あし伸びぬ
山腹にかけて

いただきに通はむ細路うねり見ゆそこにいや濃
く雪光りけり

いただきの天雲山をひろがりて空は雪けとなり
にけるかな

雪さむく山よりさきに降りそめて麓が原は木枯
の風

浅間の噴煙

かたときのまをだに煙吐きやまぬ浅間火の山に
また逢へるかも

浅間山にこがらしの風吹き荒れて煙ながるる冬
さりにけり

山麓

冬の日はこのに沈まむか落葉松の黒幹の果てひ
とときを映ゆ

○旅に來て炬燵によるもうら寂し雪ある淺間窓に
晴れつつ

なみよろふ山脈をぬきてはるかなる高山の秀に
雪すじ光る

○落葉松の葉が散りくなりまなかひは澄みきはま
れる冬空にして

麓原の冬枯草をやくほのほの搖ぎの寂しさ高く
あがりて

枯草を焼く火を守る人黒く地のとほべに見えに
けるかな

あやまちて松の下葉を焦したり草やく炎野を走
りつつ

野火たかく炎あぐれば向つ山のさまのをかしさ
よゆらゆらに揺れて

たぎつ瀬の音のするどく立ちにけり枯色なせる
芦の根をあらひ

人里にながれ來れる山川を渡らむとしつつ藻の
なびく見つ

あかとんほ里川べりの石に居てたかくも飛ばす
なりにけるかな

からまつの樹立あたりに見えなくにその葉散り
くるあさまおろしに

汽車にて

淺間山の煙秩父のやまなみに及びつつありて野
は夕映す

武蔵野の夕づく果てにたなびくは遠き淺間の煙
か雲か

汽車の窓に振りさけ見つつ淺間山廣野の果ての
天にはるけし

眠・薬

天地も眠りに沈む夜半にしてかそけき音をも聽
き分けむとす

薬のみて強ひて眠らむとする耳に夜の木枯吹き
とよもせり

ねむりぐすり飲なと我にいましめの言の葉をさ
へかなしむものを

大正十一年作

あすの朝よみ直すべき人の手紙眠らむとする床
の下に置く

多く飲まば體に障る薬なりあやまち恐れて我が
飲む悲しさ

君を見しはしばしなりしかど忘れめや言葉かは
して和みし我を

除夜の鐘

大いなる都の除夜のよるふけて寺々鐘をつき初
めにけり

天現寺のみてらに鐘をつくならむその寺知らず
除夜の鐘きく

ひきだしに溜まれる手紙多くして忘れがたから
む今年はゆくも

遠き寺近き寺より鐘なりて除夜の今宵の時たち
ゆかむ

病を得て

安房の浦西風とほく吹き荒れて磯の岩いば秀すにさわ
だつ白浪

我が立てる大岩の根を繞めぐる浪のたゆたふゆらぎ
見れど飽かぬかも

磯岩をいたぶる浪のしほけむりひとりさびしも
春の渚に

うねり来ていはほの上に打上けし浪の白泡ひろ
がりにけり

○巖の根に鳴りとよもして碎けたるうしほの名残
寂しくたゆたふ

○天つ日の光に馴るる浦人は寂しからざらむ今日
も釣する

我命またけくあらば歎かざらむ小磯の砂に珠拾
ひつつ

假住みの我にとどける包とけばかたじけなきか
夫の真心

海に来て病やしなふ明暮や心つつましく我夫を
思ふ

苞をぬぎて光りそめたる猫柳ひとひ寂しく雨を
弾けり

猫柳毛なみほほけて日は久し春埃たつ風に揺ら
るる

櫻散りて庭に躑躅の咲きつぐやすこやかにして
見る日なかりき

病もちてことしの春は逝かむとす忘れぬ手紙
も片づけにけり

何なさぬ夏のひとひは夕まけて身にわづらひの
なきが如しも

朝に結び夕べとき寝む黒髪におのれすがしむ夏
さりにけり

癒えがたき病をもてり健にありけむ我はたぬし
かりしか

大方を思ひ誤られありながら解かむ日もなく冬
深みけり

我がたのむ心をつひに墜しめし人のこころは寂
しきものを

冬の幾日ものこほしさに明暮れてひとの憤りに
も我が歎かるる

崇め居る人の怒りをうけしときこの身絶えよと
思ひつめしか

我がわざを責めらるる日はありぬとも何かは人
のわれを歎かむ

しづけさ

冬の日の幾日もわがつまと居て言葉すくなく争
ひもせず

硝子戸の日除の幕の白布に蠅のとまりくる冬さ
りにけり

戸をあけて眺むる庭の八つ手の葉こだるるまで
に霜おきにけり

この朝霜あさしもしろじろし八つ手の葉厚葉垂れたり實
をもちながら

箱根強羅

たひらかに相摸灘見ゆ草山の尾根なだれたる山
のあひだに

今日の日もやがて暑からむと思ふ色に朝露ふか
し近き草山

川上の樹立は深し細水に沁みて濡れ居る石のむ
らだつ

○谷川に脚をひたせば渦を巻き逆らふ水の力をお
ほゆ

―或は灘なしてここに流れたりいはほのあひをゆ
く水の疾たき

―河原におのづからなる石のいろ早瀬の水にとこ
ぬれにつゝ

葉言の末卷

及川壽治子へ

壽治子さん私は今歌集を編輯して居ります。いつでも歌集を編むときは、一段と新たなる想の湧き出るものですけれども、この歌集こそ、私の畢生の命が籠つて居ると云つてもよいと思ひます。何故なれば、私の生涯にまたと再びあるまじき事件さへ歌はれて居る、その見過しがたい跡を今簡単に説明すれば、そのひとつは夫を遠い國に遣つたことです。そのひとつはあの大地震に逢つたことです。夫の洋行は長い以前からこだわつて居たことですが、とうとう星一さんや濱田四郎さんに勵まされて遂行しました。私はあの時、夫が留守になれば、歌に精心できることであらうと淺墓な考から、易々と隣國へでも旅立つやうな思ひで、渡歐させてしまひました。が、その留守中にあの大地震

が起つたのです。私は留守中にあんな事件が起らうなどは夢にも感じては居りませんでした。

私は留守番はもう懲々しました。夫のために洋行は楽しい見聞でありませう。けれど仕へる父母もなく、手む子をも持たずして暮らす私には、たつた一年半の短日月とはいへ、どんなに辛いことでせう。況して莫大な物資を蕩盡したそのあとの痛手を思ふと、私はこれを再び生涯に繰返す勇氣を今日のところ持ち得ないのです。それ故に、この「留守を守るの歌」は、私の生涯にまたと経験されさうにもない、感情であらうと思ひます。

壽治子さん。それから私は歌に表れて居ないことで、一つの苦い厭な経験を味ひました。それはアララギといふ結社を退いたことです。あなたも承知の通り、私はアララギに育てられたもので、私としては

随分アララギ歌壇に精通したつもりですが、大正十二年五月號のアララギ誌上で、

藤澤古實さんが、

「海とほきあなたの夫を呼びがたき命をよもや我が死なざらむ
わづらひて夫のみとりに藥のみし我が命こそたやすかりけれ

屋根の上に雪はこほれど寒の日のひのなかにしてとけてるにけり
四月號所載杉浦翠子氏作である。これらは全然歌になつてゐない。なにを言うてゐるのだから、表さうとしたのだからわからない。また表現が幼稚であらはしきれないといふのならばよい。しかし作歌態度の根本に缺陷があるとしたなら、もはや救ふべからざることである。一體作者は何を中心にして、何に感動して歌つたのであるか。その根本が疑はれるのである。これでは、一種の狂態をあらはしたに過ぎなくなる。

この外にも随分ひどいのがあつて、十三首の多作中、見るべき歌が殆どない。この月ばかりでなく、近頃この種類の歌がかなり目につく。作者自身の作歌態度を深く反みる必要があると思ふ。(原文のまま)』と言ふのです。

壽治子さん。一寸私の立場を聞いて下さい。實は私がアララギに載せて載く歌といふものは、古泉千樫先生の鑑別を経て載せるのです。アララギといふところは、さういふところで、選者の鑑別のないものは、絶対に掲載されないので。私はアララギに、五六年間一月も休まずに、歌を出して居ますが、ある月、メ切が来るのに、古泉先生の鑑別が餘り暇がかゝるので、自分一人ぎめで發行所へ、歌稿を送つたことがあります。すると、大層お叱りを受けて、古泉に必ず見て貰ふようにとのお言葉でした。それから後の私は、二度と、さうした失

策を重ねたことがありませんが、その位、選者といふものが、アララギの誌上に絶対の権利のあることを信じてしまひました。

ところがどうでせう。藤澤さんが全々歌になつて居ない、と否定した私の歌は、私の恩師であり、アララギ同人五人の中に數へられる、その一人者であり、アララギの選者であつて、歴しもおされもしない古泉先生の選を通過したものであるから、私として周章狼狽しないいわけに参りません。

大正十二年五月一日、私は先生のお家へ駆けつけました。そして、それほど悪い歌を何故、誌上にお載せになつたのかを、先生にどうしても訊ねなければ、この私の混乱した頭が晴れさうにもありませんでした。先生は、その時、かう被仰いました。「ひとつの歌、それが非常なる傑作でない限り、褒めやうと思へば、いくらでも褒められる、貶

なさうと思へば、いくらでも貶なされる。」と、仰せながら、「僕には此頃のアララギの歌が分らなくなつたのかもしれない。」とも被仰いましたが、それらのお言葉には、非常に深い意味が含んで居るのを、感づいて、ひどく敬虔の心持になり、私は先生の前に我儘を云ふことを思ひとどまりました。その時、先生が、私に見せて下さつたのは、高田浪吉さんの原稿ですが、これが、また藤澤さんと同様私の歌を罵倒した文章です。前述のやうに藤澤さんは私を「氣狂ひの態度」と云ひましたが、高田さんは、それにまた「しんにう」をかけて、「我がアララギと歩調をとにも出来ないものは、杉浦翠子である、墮落してゆくものは……」などゝかいてありますが、私は是にもひどく腹が立ちました。

高田さんは何を云つて居るのでせう。私はこの六七年間、毎月缺か

さずアララギに出して居る者です。火山でも噴火するやうに、今日になつて俄に、アララギと歩調を俱になし得ざるの、異常なる變化が突發されたなどは、作歌にたづさはる人の常識に訴へても、考へられないことではありませんまいか。私のある特種の性格のその一脈がだんだんと色彩づいてくるといふのなら、有るべきかもしれません、もしも急に大噴火するやうであつたならば、私たちは何を苦んで牛のあゆみにも精を出して居るのでせう。

壽治子さん。私のある時の歌はよくなかつた。けれどあの批評は猶ひどい。私は大正五年から今日までアララギを見て居ますが、あの位、不親切な批評を、私のほかに誰が受けたこととせう。あの歌はまづい。けれどあの批評は猶不親切です。何處が悪いから、どこを直せとか、みな相當の注意を加へるのが評者の態度です。まるで「攻撃」にもひ

としいあの物の言方に、どこに指導のあとがあるでせう。残念ながらあの批評は私の不明を開く導火線にはなりませんでした。

それでもその當時はこんな事で、アララギをよさうとも、よされやうとも思つては居ませんでした。けれど歌はその月から大正十二年六月からびつたりと出さなくなりました。

私はアララギといふ月々の発表機関が止まることは、短歌製作上に致命傷かと杞憂しましたが、事實は豫想を裏切つて、より以上作歌に救はれる能率を見出しました。私はもう一度、アララギに復活して、「氣狂ひの態度」と云つた、藤澤さんに佳作を見せねばならないと思ひました。けれど古泉先生の選では覺束ない氣がしました。實は古泉先生の選で失策したことはこれで二度目です。この前は大正十一年十月でした。土田耕平さんから、『もう一度古泉さんに見直して貰へ、あま

りに出来が悪い」といつて、古泉先生の選を経た私の歌稿を返して来たことがあります。私、その時も迷惑をしましたが、遠い齋藤先生に訴へると、その御返事があり、その一節には、

御歌は以前の角張つたのより大へんいいと存じ賛成いたし居り候。

人の鑑賞眼はいろいろゆゑ。(略)小生にはあの月の歌は内容もいと存じ候。古泉君の批評どほりにていいと存じ候。(略)

とあつたのを思ひ出しました。古泉先生もだんだんと私の選には當惑なされるのでせう。「今後は齋藤に選をして貰へ」と被仰りました。あの五月の一日、そのときはもうアララギの選者を辭しなさるけはひが先生に窺はれました。

古泉千樞先生の鑑識が齋藤茂吉先生より劣つて居るから、齋藤先生の方に移るといふのなら、まだ許されるでせうが、アララギに歌を載

せたい。都合と方便とによつて、多年教へられた古泉先生を離れて、齋藤先生にゆくといふことに就いて、私は再び自分の心を反省しないわけにはゆきませんでした。

同じアララギ會員であつても師事する師を異にしました。折口先生の居られたころには私たちは「國學院派」と名づけたり、赤彦先生の弟子を「發行所側」と名づけましたが、國學院派が折口先生と、ともにアララギから離れた今日は、大方赤彦先生の弟子で、私と少數の人が古泉先生をたよつて、アララギのお蔭を蒙むるものでした。

今年五月號のアララギ編輯便に

「三氏（古泉折口石原）を中心としてアララギに居た會員諸氏は、この際、矢張り日光に行くのが本當であると思ふ。遠慮なくお決めに願ふ」

と、赤彦先生が被仰つてるのを見ても、同じ會員であつても、差別がついてるのが明瞭です。

壽治子さん。この赤彦先生の言葉や、藤澤さんの批評や、こんなことで私の一生の生命の捨て場と盟つて居たアララギを出ることの無念さに就てあなたは察してくれるでせう。私はどうしてもアララギを出なければならぬのでせうか。今後齋藤先生をたよることは、古泉先生に對する不義理でせうか。私の初一念に對するに何物も犠牲にして處理致すべく、許されないでせうか。

由來、赤彦先生は自分の弟子を褒める方です。これまでは土田さんを褒め、今は高田さんを褒める活字の力強さはどんなにか世人に認められたこととせう。翻つて考へますと、齋藤先生は弟子を褒めない方でした。「自分の弟子を褒めるのは我子を褒めるやうなものだ」と被仰

つて、私への藤浪の序文も随分、書き憎く思召て、あゝいふ婉曲に出られたのでした。古泉先生はある意味で遠慮なされた。

自分の弟子を褒めるといふのも、師の眞情ですが、自分の弟子を褒めないといふのも師の眞情で、前者の愛は砂糖の甘さで、後者の愛は鹽の鹹さではありますまいか。

けれどアララギといふ「道場」を通して考へるとき、赤彦先生の弟子の藤澤さんと、齋藤先生の弟子の私との背景が、これほどに差別があるといふことに前提してから、後に私は私の憤慨を反省しなければならなくなりました。

大正九年十二月から十年一月二月號あたりのアララギの談話欄を見ると、土田耕平さんの歌を由利さんが賛成しないあたりを、赤彦先生が土田さんのために辯護し由利さんを叱責する口吻など、まことに愉

快に見た人もありましたでせう。それに比較しても私に對する藤澤さんの批評については、私の二先生は一向辯護して下さらない。古泉先生の「僕にはこの頃アララギの歌は分らなくなつたのかも知れない」のお言や、それに就いての齋藤先生のウキンからのお手紙は「批評の事は餘りお氣にとめない方が如何ですか。お氣にとめてもカメレオンのやうに急に變色も出来ませんから」などと、被仰るのを思ひ合せます。

けれど、私は自分のことを云はれて馬耳東風で居られるほどに、修養や膽練はされて居りませぬ。

壽治子さん。私にあの藤澤さんの批評を有難くおうけ出来る私であつたら、私はアララギにゐられるでせう。アララギに居りつつ、藤澤さんのあの批評に否定し、反抗するやうであつたら、私は寧ろアララギに居ながら、双を祕めて居るのも同然ではありますまいか。アララ